

章立て

序章

第1章 手段としての殺人

第1節 死の鮮烈さ

第2節 拡大自殺

第2章 実行犯誕生の社会背景

第1節 母の不在と儀礼的無関心

第2節 負け組意識

第3節 政治的無力

終章 現代社会と通り魔事件

序章

2008年6月8日12時30分過ぎ、東京都千代田区外神田四丁目の神田明神通りと中央通りが交わる交差点で、赤信号を無視したトラックが歩行者5人を撥ね飛ばし、運転手は車を降りて通行人・警察官ら12人を所持していたダガーナイフで立て続けに殺傷した。被害者のうち7名が死亡した。日本の犯罪史上でも類をみないこの惨劇は、加藤智大という1人の青年によって引き起こされた。加藤はこの通り魔事件を起こした目的を、こう語っている。

「(犯行の動機は)一言で言うと、アピールのためです。自分がどれだけ悩み、苦しんでいたか、世の中の人に分かってほしかったのです。人並みに恋愛し、家庭を持ちたかったのですが、異性と交際できず、仕事の悩みも絶えませんでした。こうした心境や悩みを分かってほしかったのですが、誰も分かってくれませんでした」「6月5日につなぎがなくなっていたことをきっかけに、事件を起こすことで人間関係に悩み、苦しんでいたこと、ネットで私を無視した人にアピールしてやろうと思い、事件を起こしました」(MSN産経ニュース 2010)

この事件が社会に与えた衝撃の正体は、17人もの被害者を生んだ凶悪さだけではなく、報道で明らかになった彼の素顔は、驚くほど凡庸な青年であったのだ。加藤が掲示板に書き込んだ孤独や「非モテ」への自虐的な言葉の数々や、報道によって次第に明らかになった労働をめぐる厳しい現実など、現代に生きる人々の多くに突き刺さる背景を有していた。「自分と変わらない、普通の青年ではないか。」「もしかしたら自分がこの事件を起こしてしまっていたかもしれない。」加藤に対するそんな共感の声も多く聞かれ、「加藤がこの事件を起こしてくれたことで社会問題が明るみに出た」と加藤を英雄視する者まであったほどである。そんな一人の凡庸な青年が、どうしてこんな事件を起こしてしまったのか。通り魔

という手段をとったのはなぜか。何が加藤を事件を起こすまでに追い込んでしまっていたのか。この論文を通し、秋葉原事件を題材にとって通り魔事件のメカニズムを社会学的に分析することを試みる。第1章では、加藤が「アピール」という目的に対しなぜ通り魔という手段をとったのか、通り魔殺人という手段が持つ社会的特性を考察する。第2章では加藤智大という1人の凡庸な青年が、このような凶悪犯罪を犯してしまった社会的背景を考察する。本論に入る前に、加藤が秋葉原事件を起こすまでに至った経緯を振り返っておこう。

加藤は仕事や友人との遊びの時間以外をインターネットの掲示板への書き込みに費やすほど、掲示板に依存していた。使用していた掲示板では「不細工スレの主」として、「友達いない」「彼女いない」ということをネタにした自虐的なコメントでキャラクターを確立させていた。しかしその掲示板で、なりすましや荒らしなどの嫌がらせを受けた。加藤は掲示板上でそれをやめるよう警告するも無視され、掲示板の管理人にも相談したが請け合ってくれなかった。次第に彼のスレッドからはユーザーが去っていき、嫌がらせを含めたレスもほとんどなくなっていった。加藤は反応欲しさに、次第に殺傷事件を想起させるような書き込みをするようになる。

一方で派遣社員として勤務していた静岡県自動車工場では、派遣社員の大幅なリストラが宣告されていた。加藤は宣告当初はそのリストに入っていたものの、のちにリストラ対象から外されている。しかし事件3日前、加藤は彼のつながが見当たらなかったことに激怒し、そのまま会社から立ち去っている。掲示板には「作業場行ったらツナギが無かった辞めろってか」などと書き込むと、福井県にあるミリタリーショップへ武器を買いに行くなど、犯行に向けて具体的な準備を進めていくようになる。

そして犯行当日、「秋葉原で人を殺します車でつっこんで、車が使えなくなったらナイフを使いますみんなさようなら」という書き込みをすると、犯行までの詳細を書き込み続けた。しかし、彼の書き込みに対するレスはやはりなかった。

第1章 手段としての殺人

序章でも述べたが、加藤がこの事件を起こした目的は、「アピール」だった。それは、嫌がらせをしてきたり書き込みに対してレスをくれない掲示板の住人に対するアピールにとどまらず、彼が「不細工スレの主」として自虐的に攻撃し続けた世の中の「勝ち組」に対するアピールであったと思わざるを得ない。そしてその手段として通り魔殺人であったわけであるが、どうしてその手段は通り魔殺人というところに帰結してしまったのだろうか。

第1節 死の鮮烈さ

彼の書き込みの中にはこんな書き込みがあった。「やりたいこと…殺人 夢…ワイドショー独占」。再三述べているように彼は殺人を目的として通り魔事件に及んだのではなく、アピールのための手段として通り魔殺人という手段を選んだ。通り魔殺人という手段を選んだ理由の手がかりとなり得るのが、ワイドショー独占という言葉である。このアピールを名前も知らない掲示板の住人や世間の人々に知らしめるために、ワイドショーを独占する必要がある。ワイドショーを独占するような大掛かりなこと＝秋葉原での無差別大量殺人という結論に至ったのだろう。ただ通り魔事件を起こしただけでなく、わざ

わざと静岡から秋葉原まで出向いたことも頷ける。つまり、通り魔での無差別大量殺人が社会に与えるショックの大きさを利用して、自身のメッセージを大規模な形で世に知らしめようとしたと言える。

秋葉原事件のような通り魔無差別大量殺人は、当然ながら人々に大きなショックを与える。しかしこのショックの正体は、単なる犠牲者への慈悲や犯人への怒りだけでなく、現代社会の死にまつわる構造に裏打ちされたものである。まず、現代社会は死が隔離されタブー視される社会である。戦争のない時代を生きる我々にとって、死とは概ね年老いてから、病院などの日常から隔離された空間で迎えることが多い。そのことが時間感覚的にも空間感覚的にも死を私たちの日常から離れた場所に隔離し、私たちから死を遠ざける。遠ざけられた死に対して、私たちは自ら向き合うことをせず、目をそらすようになる。死を追いやり向き合うことを避けた結果、例えば近い人が亡くなった場合にその話題を避けるなど、死はタブー化する。そんな中、普段なるべく考えないように蓋をしている死が、突然通り魔無差別殺人という形で目の前に現れてきたら、その鮮烈さで事件は強い記憶として多くの人々の中に残るだろう。「アピール」という目的に対して無差別殺傷という手段を取るのは、この事件に限ったことではない。いじめによる自殺やテロも、死の鮮烈さを利用して、自分をいじめた相手への復讐や自らのイデオロギーのアピールを行っていると考えられるだろう。死が隔離される社会構造が、死の鮮烈さを生み出していると言えるだろう。

第2節 拡大自殺

拡大自殺とは、自殺願望を持つものが他人を巻き添えにして自殺を図るというものである。自殺をしたいけど自殺行為には踏み切れないものたちが、近年度々聞かれる「死刑になりたくて事件を起こした」という動機による殺人を起こしたり、自爆テロなど事件を起こしたあとに自殺をする犯罪者たちが、拡大自殺の典型例である。加藤は事件を起こすまでに、2度の自殺を試みている。1度目はわざと酒に酔った状態でトラックを運転し、対向車と衝突することで自殺をしようとした。交通事故ではなく自殺であるということを示すために、母親や友人らには自殺であるということをやむを得ず電話やメールで伝えた。しかし衝突事故を起こす前に車を縁石にぶつけてしまい、その際に受信していた友人からの引き止めのメッセージをみて、思いとどまる。2度目は秋葉原駅にて線路への飛び込み自殺を図るも、中央線が人身事故で止まっているというアナウンスを聞く。彼は総武線のホームに立っていたのだが、自身は中央線のホームに立っていると思い込んでいたため、それを断念した。彼は呆然としたまま上野の駐車場に止めていた車の中に戻り、「車の中にずっといれば死ぬかな」と考え車の中でじっとしていた。しかしある日、駐車場の管理人と警察官に何をしているのかと問われ、優しい言葉をかけてもらったことで自殺をやめた。そして事件当日、彼は交差点に突っ込むことを3度躊躇し、犯行をやめようと一度は思ったものの、掲示板に犯行予告をしてしまったことを思い出し、犯罪予告を書き込んだことによる懲役を恐れ、「後戻りはできない」と実行へと至ってしまった。この時に犯行を後押ししたものが、死刑の存在だった。「懲役になるならば死刑になる方がマシだ、何人か死ねば死刑になるよな」その思いが最終的な決定打となって犯行を実行してしまった。加藤はやけくそになって死刑でもいいや、と思ったのではなく、事件当時も正常な判断能力を持っていた。あくまで冷静に、自らが死刑になることを受け入れて事件を起こした。加藤がどのような思いで自殺未遂に至り、死刑を受け入れたのかは、次章で加藤が実行犯となってしまった社会背景を考察しながら触れていきたい。

第2章 実行犯誕生の社会背景

第1節 母の不在と儀礼的無関心

加藤は、どうして自分が事件を起こすに至ったのかを深く自己分析した四冊の自伝を出版している。それらの中で、加藤が通り魔事件を起こすに至った様々な思考要素は、母親から受けた虐待とも言える厳しい教育に根ざしていると自ら分析している。例えば母親が食器を早く洗いたがために食事を床に敷いたチラシの上に移して食事をさせたり、何か失敗をすると二階の窓から突き落とされそうになった。母親は加藤と同じ青森高校の出身で、青森高校は県で一番の進学校だった。だが母親は高校を卒業してすぐに就職しており、県で一番の高校の出身でありながら大学に行けなかったということがコンプレックスだったようだ。そのため、母親は加藤と弟に行き過ぎた教育を押し付けた。掛け算九九を風呂で暗唱させ、間違えたら湯船に彼らの頭を沈めた。日記や作文は全て母親の検閲が入り、テストで100点を取らないと激怒された。小学校に着ていく服は全て母親が準備し、加藤が自分で服を用意するとその服は床に投げ捨てられ、母親が選んだ服を着させられた。遠藤均は、母親から愛されなかったことに起因する自己価値観の低さから、自らの命および他人の命を軽視していたため、2度の自殺未遂や死刑をも厭わない思考、そしてアピールに対する無差別殺人という目的と手段があまりにも釣り合わない行為に出ってしまったのだと考察する。(遠藤 2020) また彼は、非常に孤独を恐れていた。家族を心の拠り所とできなかつた加藤は、仕事と睡眠以外の時間のほとんどを掲示板にあて、常に「誰か」を探していた。現実世界で親から愛されているという実感が持てなかつたがために、どんどん肥大化した承認欲求をネットの世界で満たそうとした。芹沢俊介は、ドナルド・ウィニコットの「子どもは誰かと一緒にの時に一人になれる」という言葉を持ち出し、絶対の信頼をおく存在、多くの場合は母親が担うその存在が加藤の中になかつたがゆえに、一人になるということができなかつた、つまり孤独が耐えられなかつたのだと考察する。(芹沢 2011) 掲示板になりすましや荒らしが現れ、加藤にとっての唯一の居場所が奪われてしまった。事件を起こしてしまうほど大きいこの怒りの大きさは、「母の不在」の孤独に起因しているのだろう。このような家庭状況を見かねて母親を諭す親戚もいたようだが、母親は聞く耳を持たなかつた。もしそこでもう一步、家庭に踏み込んで加藤少年と弟を救ってくれる人がいたら、この事件は起きていなかつたかもしれない。だがしかし、その一步を踏み込めないのが現代社会なのだろう。他人様のことには口を出さない、という都市の儀礼的無関心は、小さな家庭内の歪みから人の目をそらさせる。児童虐待相談件数が年々増加しているのは、虐待そのものが増えているのだろうか、近年メディアなどにも取り沙汰されることが多くなつたために他人の家庭の歪みにも関心を向けるようになったのだろうか。また通り魔事件が起きる背景として、福島章は匿名性や無名性の著しい都市では人々は他人に無関心となり、「不特定多数者の何人かを被害者と選ぶことに心理的抵抗を感じにくくなる」としている。(福島 1977: 17) 都市の性質である儀礼的無関心が、一つの社会背景と言えそうだ。

第2節 負け組意識

秋葉原事件をきっかけに大きく取りざたされたのが、派遣労働の問題だ。加藤と同様に派遣社員とし

て不安定な雇用環境で働く多くの人々が加藤の書き込みに共感し、社会問題として労働問題が発現した。竹信三恵子は、派遣労働を「排除のベルトコンベア」と呼ぶ。(竹信 2008) 派遣労働にまつわる問題は多くある。まず、働き手は労働条件を自ら勤め先と交渉することができない。通常派遣労働は、働き手が派遣会社に登録をし、働き手が欲しい企業の要請に従って労働者を供給する。そのため、派遣社員が雇用関係を結んでいるのは派遣会社で、労働条件は企業と派遣会社の間で交渉がされるため、働き手は労働条件が劣悪でも、泣き寝入りしかできないことが多い。実際に派遣労働者の労働環境は不公平であることが多い。低い賃金で過酷な労働を強いられたり、派遣社員と正社員の間で福利厚生待遇はおろかゴミ箱が使えない、社員食堂の利用料に差がある、など日常における差別を受けたりということもある。そして、企業にとって派遣社員は人手がほしい時にだけ使える存在であるため、人員整理が起きた時に真っ先に首を切られるのは派遣社員である。「首を切っておいて足りないからこいだ」という加藤の書き込みは、派遣労働者が漫然と抱える怒りを的確に表している。また、労働内容も企業にとって間に合わせの人員調達でできる単純な作業であることも多い。このように、代替可能な存在として労働者を扱うことで、労働者は働く意義や意欲を失っていく。そもそも人々は、自らの社会的存在意義を労働を通して確認している。つまり、公共圏における自分の存在の確立をするには、自らが労働を通して社会の一員としての満足感を得るしかない。しかし、代替可能な歯車として扱われると、労働者は自分の社会的存在価値を見出すことができない。その結果、加藤が掲示板で自分を卑下する書き込みをし続けたように、負け組意識を募らせていく。

浅野智彦は、加藤が抱えていた孤独の正体を、公共性の領域からの排除に由来するものであると推察する。(浅野 2008) 加藤は掲示板で、自分が孤独であり友達も彼女もいないことを自虐し書き連ねていた。しかし現実には、加藤は至って平凡と言える交友関係を持っていた。地元の青森には幼少期から一緒にゲームをしたり気軽に家に泊まれるような間柄の友人がいた。派遣社員として全国を転々としながらも、新しい派遣先になるたびに新しい交友関係を築き上げ、最後に働いていた静岡の自動車工場でも週末には一緒にドライブに出かけたり秋葉原に遊びに行くような間柄の同僚がいた。事件当日も、加藤が持っていたゲームソフトなどを同僚に譲り渡してから秋葉原に向かったようである。しかしながら加藤は掲示板に孤独を書き連ね続けた。浅野は加藤の内側に広がっていた孤独は親密圏における孤独ではなく、公共的な領域における尊重・敬意の渴望であったと述べる。それはつまり、労働で得られる自分の社会的存在価値の確認であったと言えるだろう。派遣という働き方ではなかなか得ることができない働きがいや達成感こそが、労働者が労働に求める精神的な価値であるのだ。

負け組意識をさらに扇動するのが自己責任論である。現代社会においては、同じような能力を持っていても、勝ち組と負け組に分かれてしまうことが往々にしてある。かつては地縁や家庭環境によって縛られていた自らの生き方の選択に自由が生まれ、自らの能力と選択に応じて自らの人生を決めることができるようになった。しかしある選択一つで、人生が左右される、もしくは明暗が分かれる偶然性も孕むようにもなった。東浩紀は、「多く人は、自分が成功していても、いつ失敗するかわからない、失敗するかもしれない、もしくは失敗していたかもしれないという本質的な不安定性の感覚を抱えている」(東 2008: 69) と述べる。加藤は中学までは学年トップクラスの学業成績を誇り、県で一番の名門高校に進学している。しかし高校で躓き、結果的に派遣社員として職を転々とするようになってしまう。偶然性によって人生が左右されたとしても、それを偶然性だからといって割り切ることはなかなか難しい。むしろ人々はその偶然性に必然性を求める。それが自己責任論である。自分のことは自分で決められる

ようになったからこそ、偶然性すらも自己の責任（もしくは当人の責任）として全て片付けてしまう。派遣労働の根本的な問題は日本のメンバーシップ型の雇用体系や同一賃金同一労働が担保されていない政治的な制度不足であるにも関わらず、自らの労働環境を派遣だからしょうがない、自分が派遣としてしか働けないのが問題である、と完結させてしまう。責任を自分の中に見出してしまえば、自分の労働環境の悪さへの不満は派遣としてしか働けない自分自身に向かう。そうして自虐と負け組意識は再生産されていく。

さて、この負け組意識の根底にあるものはなんなのだろうか。日本社会において勝ち組・負け組を意識しているのは主に男性である。そして、勝ち組・負け組の主な指標となるのは、主に経済力であると感じる。なぜなら女性からの支持と経済力は表裏一体で、経済力のある男性がモテるとされているからである。しかし中には経済力がなくてもモテる男性もいる。イケメンだ。一方でイケメンでなくとも、経済力があればモテる（と男性陣は信じている）。顔は生まれ持ったものなのでどうしようもないが、経済力は自分の努力次第で達成できる。だから、日本における男性の負け組意識は、男性内での格差についての意識であると言え、それは第一に経済力に基づいた「モテるかモテないか」という戦いであるといえよう。加藤がモテないという自虐や「リア充」への攻撃を掲示板でキャラとして演じ続けたのは、男性としての自虐である。男性にとって労働や経済の問題は、自分の男性としての価値に直結するといっても過言ではないほど重要な指標なのだろう。これを裏付けるデータとして、平成 27 年の厚生労働省の調査によると、自殺の大きな動機の一つである「経済・生活問題」を原因・動機とする自殺については、その多くが男性によるものであるという特徴があり、景気の良し悪しと自殺者数には負の相関があることが示唆されている。負け組意識の根底にあるものとは何かという問いに戻ると、それは「男は稼いでなんぼ」という固定観念だと言えるのではないだろうか。

第 3 節 政治的無力

日本における民主主義は議会制民主主義であり選挙による民主主義の保証が行われている。しかし具体的な政策決定は政治家のみで行われ、そこに民衆の声が反映されることはない。選挙は政治家という一部のエリートが決めたことを承認するという形でしかない。公的な形で社会課題が吸い上げられ、民衆の声が政治に反映される制度は議会制民主主義では担保されていない。民衆は政治的に無力なのである。その中で、和田伸一郎は民主主義における街路の重要性を説く。和田は街路を「人びとの不満の声を一つの共同空間で響き渡らせる共鳴箱として機能するもの」（和田 2008: 49）とする。つまり、街路はデモなどによって、民衆が社会問題を共有して提起できる公的な領域になれるということである。しかし昨今、民衆によるデモは交通問題として取り締まられ、マスメディアはデモがあったということをはほとんど報道しない。いつしか民衆は、デモ行為は政治的行為として認識されるのではなく反逆行為であるというような罪悪感を抱くようになった。沈黙するマスメディアとデモを取り締まる警察は、民衆から政治的熱狂の感覚を失わせ、政治的関心そのものまでを失わせるようになったと言っても過言ではない。そうなると、民衆は漫然と抱えている不満の正体が社会課題であるということに気づくことができなくなる。例えば秋葉原事件をきっかけに社会課題として提起された労働問題は、加藤が書き込んでいた洗練された言葉が、全国の労働者が漫然と抱えていたものうまく正体を掴めずにいた不満と共振したからこそ、加藤を支持する声が上がったりマスメディアでも労働問題が取りざたされるなど大きなム

ーブメントとなった。皮肉なことに、今回の労働問題の発現は、街路における政治的活動（デモ）ではなく街路における通り魔殺人を通して社会課題として発現した。テロや通り魔事件は、社会課題を発現させる極端な形であるとも言える。秋葉原事件に関して、加藤は労働問題に対する政治的な思惑があって事件を起こしたのではなく、あくまで私的な目的で事件を起こした。しかし前節で述べたように、加藤を追い詰めた要素として、児童虐待や労働環境など、社会問題として取り扱われるべき社会背景も考慮すべきだろう。加藤の声がネットの掲示板ではなく公的な領域での発言として受け止められていたら、もしくは加藤や全国の労働者が抱えていた負け組意識が社会課題としてきちんと取り扱われていたら、今回の事件は起こらなかったのかもしれない。

終章 現代社会と通り魔事件

ここまで 2007 年に起きた秋葉原通り魔事件について考察してきたわけだが、2020 年現在、考察してきた通り魔事件の仕組みはどう変わっているだろうか。

第 1 章では、目的に対する手段として通り魔殺人を選択したのはなぜかについて述べた。死が排除される社会構造は今も変わらず、むしろ全世界に共通して言えることであり、今後も変わらないと考えて良いだろう。2010 年代に世の中を震撼させていた無差別テロは、死という全世界共通の刺激剤を使って、自らのイデオロギーのアピールを行っていたと考えることもできるだろう。拡大自殺という側面は、死刑に関する議論に結びつけることができる。死刑制度廃止が世界の潮流であると言われる中、日本は死刑制度を容認する論が根強い。死刑制度に関する議論をここで深掘りすることはしないが、死刑が犯罪の動機や決定打になりうるということは、死刑問題を考える上で検討すべき事象である。

第 2 章では実行犯の誕生の社会的背景という章題で凡庸な青年が凶悪犯罪を実行してしまった社会的要素について考察してきた。第 1 節の母の不在に関して、今後重点をおいてケアしていくべき社会課題であると考えられる。本論でも述べたように、児童虐待相談件数は年々増加している。これを虐待そのものが増加していると解釈するのであれば、虐待を減らすにはどうしたらいいのか、虐待を受けた子どもをどう救っていくのかという課題は重要課題として優先的に課題解決に尽力すべき問題である。だが、母の不在は虐待的要素に収まるものではなく、子どもが「愛されている自覚」を持っていないことに問題点がある。女性が働くことが当たり前になってきて、離婚・再婚も珍しくなくなった現代社会において、子どもが「愛されている自覚」をちゃんと持つことができるのか、危機意識を持って考えなければならないと感じる。第 2 節の負け組意識に関して、「男は仕事」「男は稼いでなんぼ」という固定観念を捨てない限り、男性の自虐は終わらないと考える。働き方に関する議論が深まる現在であるが、性別に関する議論では女性の働き方ばかりに焦点が向けられがちである。男性を勝ち組負け組闘争から解放するとう視点を、働き方や生き方についての議論において持ってもいいのかもしれない。第 3 節に関しては、和田が論文を執筆した 2008 年と現在ではかなり状況が違っている。他ならぬ SNS の登場だ。SNS が論壇の場として登場すると、民衆の声は文字になって情報空間を浮遊し、時には空間を超えて大きな潮流を形作る。掲示板もインターネット空間に向けた発信であるが、2007 年当時と現在では社会的位相が異なるだろう。まず、2007 年当時に比べ格段にインターネットにアクセスしやすくなっていることから、インターネット空間の重大性が増している。そのため、私的領域として認識されていたインターネット空間は徐々に公共性を帯び、今となってはマスメディアを凌ぐほどに情報の基盤として不可欠な存在とな

っている。人々が内に潜めてきた一人一人の意見や小さな物語が、SNS を通してインターネット空間に吐き出されるようになり、それに対してのいいねなどのインプレッションも見える化されるようになった。今や民主主義の形は変容しつつあり、投票による民主主義の保証という議会制民主主義の基盤は、SNS という論壇を与えられた現代では捉えられ方も変わってくるはずだ。また、SNS の登場が、通り魔事件などの無差別殺傷事件とどう繋がってくるのかも、また論を改めて考察してみたい。

通り魔、テロ、戦争など、何の罪もない人が無慈悲に命を落とすことがある。人命が無慈悲に奪われることへの怒りが、私がこの論文を執筆した動機である。卒業論文ではテロに目を向け、このような悲劇を社会的に分析していきたい。

[文献]

東浩紀、2008、『『私的に公的であること』から言論の場を再構築する』大澤真幸編『アキハバラ発〈00年代〉への問い』岩波書店、62-74.

遠藤均、2020、「秋葉原通り魔事件の真相②」（2020年11月9日取得、<https://www.seisadohto.ac.jp/uploads/2020/07/fd82b3bb21c5bcc75904021e4946fca5.pdf>）

福島章、1977、「通り魔事件の背景とその対応」『罪と罰』19巻3号

加納寛子 2008 『「誰でもよかった殺人」が起こる理由:秋葉原無差別殺人事件は何を問いかけたか』日本標準

片田珠美、2017『拡大自殺:大量殺人・自爆テロ・無理心中』KADOKAWA

MNS 産経ニュース、2010、「秋葉原 17 人殺傷第 20 回(7)」（2020年10月24日取得、<http://web.archive.org/web/20110121230646/http://sankei.jp.msn.com//affairs/news/110116/tr11011619140148-n1.htm>）

中島岳志、2011『秋葉原事件加藤智大の軌跡』朝日新聞出版

芹沢俊介・高岡健、2011、『「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件』批評社

竹信三恵子、2008、『『排除』のベルトコンベアとしての派遣労働』大澤真幸編『アキハバラ発〈00年代〉への問い』岩波書店、22-28.

和田伸一郎.2008.「街路への権利を殺人者としてではなく民衆として要求しなければならない」大澤真幸編『アキハバラ発〈00年代〉への問い』岩波書店、44-53.